

今日のトピック 2016年の米国経済の見通し

個人消費主導の緩やかな景気拡大へ

ポイント1 2015年は緩やかな成長

個人消費など内需がけん引

- 2015年の米国経済は、悪天候や港湾スト、中国の人民元切り下げを契機とする世界的な金融市場の混乱などにより鈍化する局面もありましたが、年間では+2.5%程度の成長となる見込みです。
- ドル高などの影響で輸出は伸び悩んだものの、良好な雇用・所得環境を背景に、個人消費や住宅投資といった内需が堅調に推移しました。
- 物価上昇率は、ドル高による輸入価格の下落などから、連邦準備制度理事会（FRB）の目標値である+2%を下回る水準で推移しました。

ポイント2 2016年も順調に拡大へ

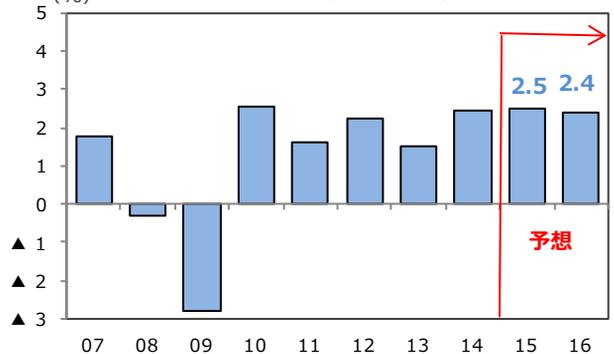
物価上昇率は安定の見込み

- 米国では、生産の拡大が雇用、所得の増加を通じて個人消費を押し上げ、それが再び生産の増大を促すという、プラスの循環が維持されています。このため、2016年も+2%台半ばと、15年とほぼ同程度の成長が見込まれます。景気の拡大ペースが引き続き緩やかなことから、物価上昇率は落ち着いた推移が見込まれます。
- リスク要因としては、海外、特に新興国の経済、原油価格の動向などが挙げられます。これらの動向には注意が必要です。

今後の展開 利上げは緩やかなペースとなる見通し

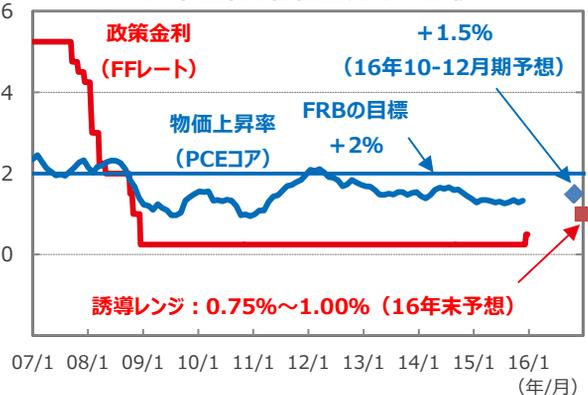
- FRBは、15年12月に政策金利を0.25%引き上げ、誘導レンジを0.25%～0.50%としました。景気、雇用の改善が持続していることから、16年も引き続き利上げが実施される見通しです。
- ただし、物価が低位で安定していることを踏まえると、利上げの速度は緩やかなものになる見込みです。16年は0.75%～1.00%へと、0.25%ずつ2回程度の利上げが行われると予想されます。

実質GDP成長率の推移



(注) データは2007年～2016年。2015年以降は三井住友アセットマネジメントの予想。
(出所) Datastreamのデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

政策金利と物価上昇率の推移



(注1) FFレイトは2007年1月5日～2015年12月28日。2008年12月以降のFFレイトは誘導レンジの上限を表示。物価上昇率は2007年1月～2015年11月。PCE（個人消費支出）コア物価指数の前年同月比。予想は三井住友アセットマネジメント。
(出所) Bloomberg L.P.のデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

ここもチェック! 2015年12月21日 2015年を振り返るキーワード 米国の「利上げ」(米国)
2015年12月 7日 米国の雇用統計 (2015年11月)

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友アセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。